

1. 目的

本インタビューの目的としては、現代社会の問題にあたる、都市と地方の格差を埋めていくためにどのような活動をしていくべきなのか、インタビューの生き方の指針とその活動を通して社会にどのようなことを訴えていきたいかを調査していくことにある。

また、コロナウイルス蔓延後の現代社会に感じる課題や、みんなで助け合わなければならないときにどのような行動をとっていくべきなのかといった、【相互扶助の精神】について意見を伺うことを、前述したものと併せて目的とする。

2. 調査データ

インタビューは2020年7月15日の10時50分からおよそ100分に渡り、Microsoft Teamsにてオンラインで行われた。

3. インタビューの紹介

今回、インタビューとしてご協力いただいた出川真也氏は、NPO法人里の自然文化共育研究所理事長、本校の専任講師、全国社会教育職員養成研究連絡協議会常任理事及び社会教育実習支援ネットワーク事務局長を務めるなど、様々な活動を行われている。今回のインタビューでは、NPO法人里の自然文化共育研究所でのお仕事にフォーカスをあて、対応していただいた。

4. インタビューの概要

本インタビューでは主に10の項目に分けて質問を行った。以下、インタビュー内容をまとめたものである。

・どのようなお仕事をされているか。

NPO法人里の自然文化共育研究所の理事長を務めている。主な活動内容としては、山村地域での潜在的な能力、その地域に根差した知恵や能力や、昔から大事にしてきた文化や生き方、助け合いの重要性を発見していくことである。その一方で現代社会における構造的な問題として、経済的には厳しい東北地方の山村地域の実態があり、活動当初の地域の住民はなかなか自分たちの価値を日常の中で発見していきいくことが難しかった。そうした中で地域のことについて学びなおしていくという活動をしていくうちに数多くの価値について気づき、自分たちが潜在的な能力を持っていることを再発見していった。

さらには、地域の人々は自分たちが今まで積み重ねてきたことを子どもたちにも教え伝えていきたいという思いが強くなり、地域について再度学びなおしていこうと考えた。その結果、組織的に有志の方々と地域の運営学校を開くこととなり、地域の人たちが自然環境を自分の手で再度学んだ知見を活かして子どもたちに継承していく仕事が本格化した。地域の数多くの経済的な問題、過疎・少子化などの地域の問題を若者たちが担えるような

生業を作っていく、教える「教育」ではなく、共に何かを育む「共育」を実践していくことを目標とし、持続可能な形で地域を存続すること、場合によっては変革してよりよくしていくことが仕事の概要である。

・仕事を始めた「きっかけ」

22歳くらいの時に、大学で地域のことを研究していくのにメインとなる発言者が、地域の人ではなく研究者や都市部で生活している人たち、村に所属していない外部の人たちが中心となり、地域のことについて語っていた。しかし、自身が田舎の出身であったことから、自身の考えと、発言者の内容がズレていると感じたため、実際に地域の現状を見てみたいと思ったのがきっかけである。

また、地域のことを客観的に学ぶことはありえないことであり、外部から村に入ると地元には様々な影響を与えてしまう。さらに地元の人たちの志向性が異なっているため、地元でインパクトを与える行動を考えた時に、意識的に取り組まれている方々とアプローチをとる機会が多く、地元で活躍していたNGOの人たちと交流し地元のことについて学ぶ機会が多くあった。その後も全国を回る中で、とあるシンポジウムに参加したときに東北地方の山村地域の自然環境を調査する活動や青少年育成の委員をされている方に出会う機会があった。話をしていくうちに面白いと感じたこと、所属していた大学の隣県であったことからその地域に足を運んだことが村に出会ったきっかけとなった。

そこで、まずは実際にきちんと調べてみようと思い村に入り調査していった。その結果村の良いところ数多く発見でき、一人で調べ切れなくなった。そこで地元学という手法を用いて、住民全員で地元を調査しなおしたところ、そのままにしておくにはもったいない知見が多く見つかった。地域の皆さんと話し合い、発見した知見を子供たちに教え伝えていきたいという志向性がきっかけとなり事務局を作り、行政等の仕事を請け負う過程を経て里の自然文化共育研究所としての活動を開始した。

・仕事をしている中で楽しいことは何か

役職は変わっても全員参加の会社であるので、活動当初から変わらずにミッションを達成したときに、地元の方々と分かち合える達成感を大切にすることを目的としている。このことからその喜びが見られた時に感じるものが楽しさである。また、学習に参加しているすべての人のモチベーションを上げているときに調整役として大変でも参加している人々の楽しんでいる姿を見るとき満足感が楽しさに繋がっている。

・仕事をしていて辛いことは何か

楽しさ・達成感がある仕事のため、乗り越えられることが多く、辛さを忘れる。しかし、深刻で少し辛いと思ったのは、草の根的な市民活動・住民活動で、住民の内部で活動をきっかけに葛藤が起きて亀裂が生じてしまう。そういった場面を見るのが辛かった。そ

れを乗り越えていくような業務をこちら側からうつが、それが中々理解されるまでに時間がかかるところが辛い部分であった。

また、現代社会の裏のような部分も見えてしまうこともあった。行政からの指示で地域の資源や学習活動を通じて課題解決を図っていき、住民の運営で生業や産業に発展していったのだが、発展してきていることが分かると行政から運営権を譲るよう圧力が加わった。その背後には研究者などの存在があり、住民の中でも行政に携わっていた人たちがうごめき始める。だが運営権が渡った数年後には結局、行政が運営しきれずに、こちらに運営業務が戻ってくるのだが、住民の人々が対応できないため、最終的にはその取り組みが変質して消えていってしまう。この一連の展開が見ていてとても辛かった。これに対して、地域の方々が意識的に団結していけるとよいのだが、なかなかそこまで意識浸透していくまでには時間がかかる。事業は年々展開していくものであるため、時間を要し、間に合わない。要するに、住民の意識変革と実際の事業業務の進捗度合いが違うため、うまくいかない。そこも辛い所であった。

自由に色々発言し、それを自由にアレンジして、頑張った人が頑張った分だけ報われる、といったものは表面的な社会であるということが実際の現場を通じて経験してきた。それを実際に一生懸命取り組んでいる地域の方々の中には色々な方々がいて、被害者・加害者の二項対立では語れない部分がある。色々な事情がある中で、住民の結束が崩れていくというのは、結果的に権限を持っている者の格差的なものを乗り越えていくことが中々に難しい状況になることでもある。

以上のことが仕事を通しての辛い部分と言えるだろう。

・仕事をしていて学んだことは何か

活動内容として、現地での教育学習活動やそれを基盤にして地域づくりをしていく取り組みを行ってきたが、改めて「研究」や「理論化」といったことが大切であることを学んだ。現地の不公正・格差・構造的な課題や問題を解決していくためには、現地での活動・具現化していくことも大切だが、それだけでは限界であると感じるようになった。前述したとおりの辛さを経験したことによって、少し距離を置き、分析・整理して他人に分かりやすく示していくことが大切だと感じた。また、集落での問題は他の外部の問題ともつながっているため、そのなかだけで解決していくというのは困難であり、外の地域や様々なキャリアを持った人々と連帯していくことが必要であると改めて学んだ。

また、以上のことを次の世代、学生たちや専門的なコーディネーターなどの支援者となる人たちに伝えていくことが同時に大切であるということも思い、大きく学んだところである。

・仕事をしていくにあたって意識していること、また、気を付けていることはあるか？

NPOの活動をしていくにあたって、自分で設計して提供をするといった形にならないよ

う意識をしている。住民自身、学習者自身が自分たちで育てていくようなプログラムを自分たちで編み出していくということが大切であるため、その力や機会を削いでしまうことになるため、地域の方々と共に作っていくことを非常に意識している。

また、自分自身が知らず知らずのうちに権力や権限を持った立場で参加している可能性も何らかの形であるため、そういったことを自覚し、取り回していきながらも、支援を受ける側・学習者側へエンパワーしていくためにはどうすればいいか、ということ意識している。エンパワーしていくためには自分も含め参加していくなかで、互いに育っていくものであるため、誰かが誰かを力づける、ということではなく、共に活動をやっていくことで共に力を得ていくということを重視している。

・今の日本の社会についてどう考えているか

民主国家と言われていたが、それは形式的にすぎないと思う。現場を経験していると凄くその社会的構造が見えてくる。不平等な社会であると思う上、その社会的な不公正は、形式的な民主国家によって見えにくくなってしまっている、平等な権利を享受できない人たちが大変増えてきてしまっている、そういう社会なのではないかと考える。その社会を乗り越えていくためには「教育」や「学習」が大切だと思うが、その「教育」「学習」の制度そのものが、問題視している不公正・格差を生み出している可能性もあり、その部分も含めて非常に懸念が残る。社会教育も決して無関係ではない。しかし、このことを自覚し、変革していくことで、後の世代に継承すべきものになるはずである。今の世代には変革力というものが少々不足していると感じる。そのため、若者たちを変えていくという力を持っていくべきだと考えるが、今はその若者の可能性や発想をも摘み取ってしまっているところもあるのではないかと感じてしまう。人それぞれが目的・人生観を発揮できるような社会を作り上げるべきなのだが、今の社会はそのように感じることは出来ない。

・今後の社会はどのように変わっていくと想像するか

変わっていく、というよりも変えていかないといけないのではないかと考える。今日の社会で多用されているインターネットにおいて、メディアなどが自由に相互に情報を発信できるようになったわけだが、その反面、色々な抑圧や居心地の悪さ、つまり相互俯瞰社会的なものになりつつある。やはり、人は自分自身のことを自分自身で見つめなおし、学んでいくことをしていかななくてはならないと思う。その延長線上として、他の人たちから学んでいくこともしていきべきだろう。地域においても、自分自身の地域から学んでいくことを意識的にやっていくことが大切である。

現在の「グローバル社会」という言葉においても、ITなどを通じて全世界と繋がっている感覚があるかもしれないが、それは表層的なものに過ぎない。やはり、根本的には自分自身の経験や境遇、心の在り方にどう向き合っていくのかを意識的にやっていくべきなのではないかと考える。社会は人間によって構成されているという概念のため、自分自身か

ら学んでいく意識を持たず誰かに委ねてしまうと、ぼんやりとした社会像しか見えなくなってしまう。そのため、社会を構成している人間(自分)がどう変えていくべきなのかを意識していかななくてはならないと思う。

・日本の社会で変わってほしくないところ、良いところはあるか

日本の良さはやはり相互扶助なのではないかと考える。我々は日本人であるため、その日本独自の良さを活かして今ある課題や問題を解決していくことも大事なのではないかとと思う。

日本は生物多様性が大変高い国であると NPO の活動等を通して感じた。この日本の自然の豊かさというのは人が介入したうえで作られた自然であり、人が自然を活用していくなかで色々な生き物が生息でき、生産力を増していくといった流れが、日本人は持続的に行っている。それは自然の知恵や文化を大切にして、その精神が絡み合っている社会があるからこそだと考える。前述した変革していくべき社会はあるが、このような社会は次の時代に継承していく必要がある。また、里山の自然文化に根差した社会環境・文化伝統の有り様、相互扶助の精神を受け継いでいきたい。

・仕事を通して社会にどのように影響を与えていきたいか

地域の方々にとってコロナ・地域格差・少子化などの様々な問題の中で、自分たちがそういう境遇に立っているかを意識化することが大切である。例えば地域格差でいうと、地域集落では買い物する場所がない、コンビニが近くにない、などは問題ではなく、自分たちの中にある意識の格差が真の問題であることに気付いた。「自分たちにはユニークな能力があるのに、それを活用し得ていなかった」そこに気付いていくのが大事である。コロナ・地域格差などの問題には、世間一般的に言われているような表層的な課題が提言されているが、本質的な真のニーズは、それぞれの地域や人々によって違ってくると思っている。そういったことを気付き、学び、向き合っていけるような教育学習活動に力を入れていきたいと思っている。

5. インタビューの「活私開公」

およそ 100 分に及ぶインタビューの中で、インタビューの様々な「活私開公(※)」について垣間見ることが出来た。次世代の若者・支援を受ける側・学習者側に継承すべきもの、変革していくべきものをしっかりと自覚し、自分自身から学んでいくということを、意識的に行うことで、人間で構成されている社会は変わっていくだろう。表層的な社会構造を見るのではなく、自分自身の経験等を通じ、根本的でより真に迫った社会構造を見ることで、本質的な課題やニーズを見出すことが出来る。これがインタビューが思い示す「活私開公」の担い方なのではないかと思う。

※「活私開公」とは、1人1人の個人の生き方を尊重し、「私」（個人）を活かしながら、共に分かち合い、共に手を携えて豊かに生きる地域・社会を創る精神のこと。

6. 感想

私は今回行ったインタビューの中で、インタビューイが示した社会の課題・問題を達成するために、社会構造を作り上げている我々人間自身が1人1人意識を変えていくべきであると感じた。その意識を互いに育み、エンパワーしていくことで、日本独自の相互扶助の精神が高まり、より課題・問題を解決していく変革力のある社会へと変わっていくのではないかと考える。